校長室だより～燦燦～ №４６０

保健の先生

2021.11.22

小学校、中学校、高等学校には、保健室がある。保健室には養護教諭がいる。いわゆる保健の先生である。私は今まで、何人の保健の先生と出会ってきたのだろう。思い返してみると、ある共通点に行き着く。それは、一言でいえば「気が利く」ということであろうか。気が利く人が、養護教諭になっているのか、養護教諭だから気が利くのかはわからない。

私はというと、保健室には近づかない子どもだった。唯一、保健室のお世話になったのは、高校１年生のときだった。保健体育の時間に、高校の近くの山に走りにいった。そこで、事件は起きた。板の切れ端に釘が刺さっていた。私は見事に、その釘を踏んだのである。それもちょうど足裏の中心部分である。走っていたのは道路ではない。山の中である。草や葉っぱに隠れて、こちらをにらんでいる鋭利な釘が目には入らなかった。

一瞬、何が起きたかわからなかった。激痛が私を襲った。我慢強い私でもだめだった。びっこを引いて、何とかかんとか学校にたどり着いた。一応、保健体育の先生に報告してみたが、「保健室にでも行っとけ」ぐらいの感じだった。昔はそんなもんである。

仕方なく、保健室にいってみた。そこには、保健の先生がいた。事情を説明した。すぐに消毒をして、何かを塗り、包帯をしてもらった。今でも、その記憶は残っている。なにせ保健室のお世話になった唯一の経験である。やさしくしていただいた。人間、傷ついたり、弱っているときには、だれでもやさしくしてもらいたいものであろう。

問題は、どうやって家まで帰るかである。帰りは上り坂なので、片道４０分もの道程である。あの状態で、よくも自転車のペダルをこいで帰ったものである。根性があるとしかいいようがない。必死だったのである。すぐに医者にいった。お医者さんも、消毒をして、何かを塗って包帯をしただけである。保健の先生の処置と大差はなかった。足の裏に、細い穴が開いただけである。特別な治療法があるわけでもない。その後も自力で自転車に乗って通学していたのだから、昔の子どもは強かった。それが当たり前だった。

学校における保健室の役割は、以前にも増して多様化し、その重要性は大きくなるばかりである。養護教諭の使命も複雑化、多様化しているのかもしれない。それでも、保健の先生は、気が利いて、やさしい人であってほしい。ときには、子どもたちの背中を押す役目も必要だろう。保護者との関係も大切である。

養護教諭は、多くの学校で一人しかいない。その点では、校長や教頭と同じである。相談できる人もいないかもしれない。保健の先生ならではの苦労や辛いこともあることだろう。それでも、学校には、保健の先生が必要なのである。保健の先生が明るくなくては、その学校はどうなってしまうだろう。学校における“太陽”のような存在、それが保健の先生である。